

石川・乾遺跡 (B地区)

- 1 所在地 石川県松任市乾町地内
- 2 調査期間 一九九〇年(平2)九月～一九九一年九月
- 3 発掘機関 (社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 4 調査担当者 藤田邦雄・浜崎悟司・沢辺利明・山川史子
- 5 遺跡の種類 墓跡か
- 6 遺跡の年代 一七世紀～一八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(金沢)

乾遺跡は縄文時代晚期～江戸時代前期にかけての複合遺跡であり、その内のB地区上面、約三〇〇〇㎡に江戸時代の遺構が密集している。中でも一六〇基以上を数える土坑(墓か)群は圧巻で、出土遺物は肥前陶磁器をはじめとする多彩な生活用具で構成される。

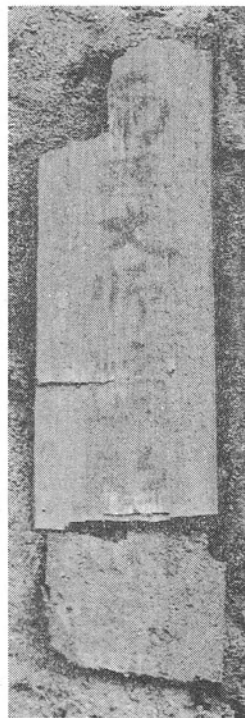
木簡は七・七m×四・二m、深さ一m前後の不整楕円形を呈する大型土坑SK六六の底面近くから出土し

ている。土坑内の遺物量は多く、見込に砂目跡を持つ肥前陶器類のほか、凝灰岩質の亀をかたどった文鎮、木製の柄を伴う菜切り庖丁、食膳具の折敷を転用した俎等が共伴する。土坑は低位に水を湛え、供養に伴う廃棄施設と推察されるが詳細は不明である。時期的には一七世紀前半～中葉頃に比定されようか。

8 木簡の釈文・内容

(1) 南無大師遍照×

(74)×25×1.2 081



経木塔婆の一部であり、確認されているのはこの一枚のみである。下方の欠損部分には真言宗の開祖空海を表す「遍照金剛」の文字が続くとみられる。裏面は空白。このような宝号の記された経木塔婆は、真言宗の寺院を中心に現在も用いられており、当時の使用方法を知る上で重要な視点を与えてくれる。

9 関係文献

(社)石川県埋蔵文化財保存協会『年報二』(一九九一年)
同『年報三』(一九九二年)

(藤田邦雄)